

年賀はがきの表現

— 年賀状考現学 —

伊藤 嘉夫

向う三軒両隣りや、大家お大家さんから日頃お世話になった人、近親縁
辺への年始廻りは、欠かせない風俗であったが、生活様式の変化な
どで、今は全く衰えた。然しこれに代って年賀状交換の風習がおこ
って、郵便制度の発達するに添って盛んになった。郵便はがき一〇
〇年記念が昨年行われたので、年賀状の歴史もその位である。

年賀はがきは、年賀に廻るわずらわしさを省き、また賀意を伝え
る範囲が極めて広くなるというので、賀状の風習は燎原の火のごと
くひろがり、虚礼廃止の水がかかたくらいでは、衰えそうにもな
い。私は明治二十年代の正岡子規の賀状を見た。わくがとってあり
俳句が何首があった。佐佐木信綱宛のものであった。落合直文が房
州に療養におもむいていた頃の歌で

片かなの片なりながら文書きて子はおこせたり年のはじめに
は、子息からの年賀状であつたらう。木村正辞のある年の年賀状に
は、元暦校本の影印で、巻末の「新たしき年の始めに降る雪の…
…」の所持の歌の出されたのも見た。賀状には、丁寧なのは封書、

名刺を封筒に入れた小さいのもあったがこれらは例外で、郵便はが
きが本態で、14.8cm×7.6cmの範囲に工夫の加えられた年賀状は百年
の歴史を伝えるのである。もともと葉書の大きさは、従来は「目×
6目」であったものを、戦後今の大きさになった。戦中には従来のも
のより小さいものが発行された。資材節約の為であった。外国のク
リスマスカードに類するが、これが封書を原則とし華麗なものであ
るに對し、年賀状は葉書を原則として、簡素なものである。郵政省
の発行するお年玉付年賀はがきは、慈善事業寄付がついているのと
いないのがあるが、これを使っての賀状が一般的になった。

本稿は、今年私の手許にとどいた一三三〇通（十日まで）につい
て、賀詞、添書等にあらわれた様式、思想などを見ていきたいと思
う。まず、台紙、（年賀はがき・官製はがき・私製はがき）と、宛
名書きの用筆（毛筆、サインペン、ペン）についてみる。

（台紙） 毛筆書き サインペン ペン書き 計

年賀はがき	二二三	一一八	八〇一	一一四二
官製はがき	四	三	一九	二六
私製はがき	三四	一七	一一一	一六二

（計） 二六一 一三八 九三二 一三三〇

官製はがきは年賀はがきの間にあわなかった人が使うようで、遅れ
て書いたものに多い、その数は去年の半分で、去年のは十年前の半
分であるから、十年前の四分の一になる。毛筆が多くなり、サイン
ペンが減った。宛名の横書は四通しかない。毛筆の多いのは習字ブ
ームが影響している。これが多くなるのは、毛筆使用のない時代現
象としてはうらはらである。あらたまつたものに対する毛筆は、権
威あるものの如き感覚があつて、この頃結婚式の披露宴の受付で署

名を求めめるのに硯と毛筆がおいてある例が多くなった。

賀詞は、長年の伝統が確立した、文だの語だのがあって、ほとんどその語、文によるものが多い。同一賀詞のもので十位まで、

	74年	73年	64年
賀詞			
1 謹賀新年	三二	一六四	一三六
2 あけましておめでとうございます	三三	二三〇	二三〇
3 賀 正	二三	三三三	四九
4 謹んで新年のお祝詞を申し上げます	六七	五七	五九
5 頌 春	七	七	八
6 謹んで新春のお慶びを申し上げます	六六	四九	三二
7 新年おめでとうございます	六	九	七
8 賀 春	六	六	九
9 謹んで新年のお慶びを申し上げます	四	八	七
10 新春のお慶びを申し上げます	三	一〇	三

74年(本年)と、73・64の兩年の数と順位を示した。十年以前と比較して、めざましい変化というものがないのを見ると、一度確まったものの、容易に変らないことを知ることが出来る。(ちなみに、調査対象は74年は一三三〇。73・64年は共に一二六七で、これの五%増が74年の数になる) 例えば、「あけましておめでとうございませう」73・64が共に二二〇なのに五%の一を加えると、二二二一になって、偶然ではあるが、十年に三度の調査で全く同数になる。このようにして同一賀詞に分類し、さらに賀詞の類型によってわけると、1 漢文漢字型(六五五)、2 めでた型(三〇五)、3 御慶型(二〇六)、4 祝詞型(一一三)、5 雑型等(五〇)あわせて一三三〇になる。雑型は一応型として成立しているが、数が少ないものを含

み、自由で勝手なものまでを繰ざらいしてある。
各型にわけて調べて行く。

一 漢文漢語型 六五六(73五九五・64四八五)

漢文語法型というのは、謹賀新年、賀正に代表される最も親しまれた賀詞を中心に、展開する。まずその種類と、表記表現の上で、活版によるもの、木版・賀印・孔版・手描きなど、製作に意途を用いたもの、毛筆又はペンの自筆で賀状を認めたものに分ける。

	活版	手製	自筆	計
謹賀新年	一三三	三	七	三二
賀 正	三	八	五	一六
頌 春	四	三	八	一五
賀 春	二	〇	四	六
迎 春	三	三	六	一五
恭賀新年(八)以下(一)まで	一六	二	一	一九
(計)	一七〇	一四	三六	二二〇

恭賀新年以下三十種五七通については、八の一の頻度のものである。煩瑣をさけて一括した。一一については後にのべる。何となく従来の賀詞に抵抗を感じ、賀詞をさけて類を同じうする考えが底流するが、奇を追って賀意を喪ったものもある。

漢文漢語型六五六は、総計の五〇%で、日本人の漢語好み、定型化し、謹賀新年、賀正などは、明治時代から用い古されたものであるが、一度定型化した伝統というものが、中々ぬぎがたいものであることを示している。十年前の調査も全く同じ傾向を現わしているのであった。猶、表の分類の活版は活版印刷にしたもので、全体の五三%に近く、省労のあらわれともいわれよう。手製は、賀印や

木版、孔版、手書きの絵やはり紙画などを配したもので、木版には字面の少い賀正が多用され、手製の数がその事実を語っている。自筆には、毛筆を用いたものもあるが概ねペン字である。漢字を愛するためとは云え、「迎春」「春」「虎」など、当人は年賀のつもりで、文字は賀意を含んでいない。

次に、賀状の構成について調査する。1賀詞だけを出したものの、2賀詞と添書を印刷しただけで手を加えていないもの、次に、3賀詞に、又は賀詞と添書の印刷に更に自筆の書込みをしたもの

(賀詞)

	横書	賀詞	添刷	書込	計
謹賀新年	(六)	〇	二五	二六	三二
賀正	(六)	三	八五	三三	三六
頌春	(六)	三	三三	三七	三九
賀春	(六)	三	三〇	二五	三六
迎春	(六)	三	三〇	二五	三六
恭賀新年等	(三)	一六	一元	八	三〇

(計)

	横書(五)	一六	一元	三三	六六
--	-------	----	----	----	----

(謹賀新年) 賀詞だけのものは、概ね活版であるが、手書きのものにも一、手製のものに一四ある。簡素であるが、さっぱりした片輪みたいで何か書き入れがしたくなる。そこで「本年もどうぞよろしく御願ひ申し上げます」「今年もよろしく」と書いたのが三五通、健勝、多幸をいのるが二三通、その他は子供の事、近況のことなど「子供達に追いまくられてあっという間に一年がすぎました。大洋は四月から幼稚園です」「十二月長男明則が生まれました」「六才四才二才の三人の子供に囲まれて幸せな日々を送っています。」など。概ねが自分のことに關している。賀状に添書をつけるのはすでにし

きたりにもなっていて、「併謝平素之疎遠、尚祈高堂御万福」といったもので、書き下し口語で「併せて平素の疎遠をお詫び申し上げ尚一層の御交誼をお願い申し上げます」と云ったものが定着して活版で行われている。この「疎遠を謝し厚誼を願う」型のもの、一〇、「愛顧引立を願う」もの二三、「よろしくお願ひ申し上げます」に類するもの三二、以上は要するに自分中心で、「多幸をいのる」が二七通が例外のようで、自分に関してのことが中心になっている。その他は種々雑多である。中には何思っか、賀詞の次に「あけましておめでとございます」「新春を壽ぎ謹んでお祝詞を申し上げます」など、「謹賀新年」の賀詞を無視して、もう一度賀意を表明した御ていねいなものもある。然もこれが五通も活版印刷で出て来る。東京の人である。江戸っ子の早とちりか。中には「今年も小さいながらの努力をつづけますのでどうぞよろしく」と、ちょっぴり心境を刷りこんだり「たとえ人殺し戦争がなくなっても、石油を売らぬぞ、食糧を売らぬぞ」という物おどし戦争がなくならぬ間は、住みよい地球ではありません。みんな地球市民の心を持ち、国連が改組されて、世界連邦が誕生する日の一日も早いように祈ること元且です」と、心境と念願が刷り込まれたものから、「水山けん三・山天大畜上」と易を立てて卦をあげ、二三年は苦境がつづき努力次第で52年頃に明るい体勢を取り戻すことになるので反省自重が必要だなどと云ったもの、などから、自分の近況をこまごまと二五〇字ほど認めたものもある。然しこれら一一六通には添刷があるだけで自筆の書き込みはない。つまり、前の八〇とあわせて一九六通は刷りっぱなしか書きはなしで、手書きの書込みの入っていないもので、一つには省労の意途が、無意識にしても入っている。次に、刷り込

みのある賀状の書込みは、比較的簡単なものが多く、「七十九になりました」「今年もよろしく願ひ上げます」「御健勝のほど祈り上げます」など。然も賀状には「新春を迎え皆々様の御多幸を祈り上げます」とあって、やや重複しているが、心が入っていないとは云えない。やはり子供のことを書いたのが五通ある。「早いもので由季子ももうすぐ二才になります」「今年長男が一年生になります」「親子五人元気にやっています。」など。前に近況報告など。然し一寸でも書き入れがあると無いとでは受けた方の感じがちがう。歌句もある。

命ありて前期の講義竟へえたりコスモス揺る坂下りゆく荻野恭茂
遙かなる歴史の息吹聞ゆるか廃墟の彼方山の光れる 神向寺英

余生ぞと吾が思ひつつ石井家の茶室に迎ふ三度目の春 小池栄寿
安けさのありと思はむ新春の光あかるき枕辺の蘭 鈴木田鶴子

(賀正) 賀詞のみのもの、活版四、手書七、手作り一六というめずらしい分布。手作りでは賀印だけが四、あと一二は木版や手書きの図案など。賀正の字画が簡単なものと、簡素な語感が愛されていることであろう。手書きの書込みは、「物質文化の中で育った私達が一番反省しなければいけない時なのでしょうか。畜心のない人の和の国でありたいと思っています」「多難な年になりました。人類の英知よがんばれ」「厳しい年になりますが精一杯がんばりたいと思います」。「人類史幾千年の中味をば味はひ尽くし大き祈りを」などの短歌もあるが、「御長寿をご祝福申し上げます」といわれると、自覚のない私にはがくと来る。「ほどほどにがんばって下さい」と云われるとなおのこと。相変らず「今年もよろしく」が多い。刷り込みの添え書きは謹賀新年の場合より楽になっているが、「新年のお慶

びと皆々様の御多幸をお祈り申し上げます」という同文のもの三通あるが、これは熊谷、東京、千葉で、おそらく年賀状の見本中にあるものから選んだのであろうが、文を成さない。祈りは新年のお慶びと御多幸にかかり、御多幸はともかく、お慶びを祈るといのはどういうことになるか。見本帖の曲者は国語を乱す張本人に時々なる。終戦の昭勅の「万世の為に太平を開かんと欲す」の条と、憲法第九条の武力行使の放棄の条を刷ったのもあれば「石油不足、紙不足、インフレ、今年のお正月いかがお過しですか、生れつきケチな人間には、かえって住みやすい時代になったようにも思えます」というのもある。刷込添書に書入れたもの大同少異。相変らず「よろしく」が多い。

倅とは斯くいふならむ開け放ち正月の部屋に鶴亀語ふ 乾 涼月
ベンチのあれば憩へり藤棚のその冬の日の影まだらにて室伏秀平
冬木する杉の小鉢に水注ぐ耐へるものあはれ美し 永井富由
よき年を迎へ迎へて知らぬ間に八十路の坂も半ば上りぬ青山緑葉
(頌春) 字づらがやや文学的で愛される。朱で「頌春」として、昭和甲寅歳旦と住所氏名だけ黒で印刷してあるのなど一寸よい。版面六、自筆一。三百字内外の刷込添書が八、手書で書き入れたものも長文がある。歌を刷添えたもの五。これも書込など大同少異なのである。

朝床に思へば遙しジュネーブの湖も空も蒼くありけり白田甚五郎
咲きつづく一人静の花白く樹の下道は細くつづけり 長田貞雄
朝明の伊豆の御山を仰ぎ見る花咲く梅の若木の下で 中田敏子
一弁のほぐれたるまま頑なに咲くを拒める床の芍薬 古木てる子
山々は波の秀に似て連れりおのづと広きもの吾に満つ 高橋義子

夕さればイラクリオンの天にして太古の如く星静なり望月登美子
(賀春) 頌春が詩的やや高踏的語感があるとすると、これは散文
的、一般的で、親しみやすい感じである。九十一歳の山川柳子氏も
自筆で書かれている。賀詞のみのもの活版三、自筆二、自製のもの
八。賀詞に自筆で書き込んだものは、「今年もよろしく」の類一七、
「多幸をいのる」もの四、子供のことを書いた四、自分のことだけ
書いたもの二。計二七。添書の印刷したもの、「本年も又、良く逸
び、のんびりとやりたいと思います。何分よろしくお願い申し上げます」
など、多少のんびりとした添書があり、短歌二、俳句二がある。
「愛があるところに神があり平和がある」「あわせてクリスマス
のお慶びを申し上げます」ここにも「新年のお慶びと皆様のご多幸
をお祈り申し上げます」が出て来る。浦和の人と東京北区の人。更
に歌を書き込んだのが二、賀春に短歌を刷り込んだり書き込んだ
人、五人俳句が二人になる。

門庭のよき位置しめて咲きいづる水仙花あり我に春来る朝吹磯子
切に自愛せんと思ふは今少しましな世界を見て死なん為 渡辺久
檻に居て夜は眠りを強ひらるる動物園の虎を憐れむ 加藤政吉
観音崎の黒耀石断崖波打ちて時じく鳴れり海の広きに釜田喜三郎
(迎春) 春を迎えるというだけで賀意はないのに、賀詞の中にわり
込んで来て、年々その数を保っている。言葉に対する反省が無いの
であろうか。詞だけの三枚は、寅の板画でうち二枚は年月も名も出
さない。さすがに添書や書き込みのないのは外には一通もない。何
となく感じられるからであろうか。「お揃いで新春を迎えられたこ
ととお慶び申し上げます」「新春のお喜びを申し上げます」「新春を
寿ぎつつしんでお祝詞申し上げます」「つつしんで新年のお祝詞を

申し上げます」などあるのはよいとして一七通までが賀意をあらわ
す言葉を出さないで「久しぶりで田舎のおいしい空気を胸いっぱい
吸いこんでおります」「暮にツメ療垣で右手の母指を少し切りまし
たがお蔭まで一同元気で」「いつも心の隅で私の事を心配して
下さいまして有難うございます」とか、「一才九カ月のヤンチャな
女の子に毎日フー云っております」「上京したいのですが子供
が二人になり…」と自分の事をいい、最後に「今年もよろしく」と
なっている。

(恭賀新年) 等。四字にまとめて賀詞とするものは、ほとんど謹賀
新年ひとり榮えて、その他はほとんど衰退してしまった。その中で
その数は少くても年々その種のつきない幾つかがある。

恭賀新年(八) 恭賀新春(三) 恭賀新禧(二) 恭頌新禧(二) 敬
頌春禧(二) 延年永寿(一) 敬賀新正(一) 万福改同(一) 頌春
献寿(一) 延年益寿長年未央(一)

御慶(三) 献寿(三) 寿春(三) 瑞春(二) 新禧(二) 献春(一)
慶春(一) 春寿(一) 寿正(一) 頌寿(一) 初春(一) 新年(一)
賀新春(一) 賀新禧(一) 賀虎春(一) 春潮来(一)
春(三) 賀(三) 寿(三) 寅(二)

三十種、計 五七

これらの賀詞で、四字の賀詞は概ね賀意もふくみ、それぞれ安定
した感があるが、「初春」「新年」などは賀意がない。三字のもの
で、賀虎春の虎の文字にやや抵抗がある。「春潮来」はわかりにく
い。一字は何れも未完成の感じである。春や寅には賀意もない。何
となく書いたと云った感じである。「新年」「寅」「寿」「春」には添
書も書き込みもないものが七枚もある。賀詞が変わっても変りばえの
しない添書や書込である。「サンドトトヌ」に三年連続入選の清彦

の便りに思ひがけない副産物、バリジェンヌを嫁に貰ふとの事、いよいよ私も青い目の孫を持つことになりました。西田が二度目の外遊で、パンタロンスーツで帰朝して驚いています。私は北岳の頂上で六十一才を祝しました」などという近況報告もある位である。相変らず自分のことが多く、「今年もよろしく」というのが多い。短歌を書いてゐるのが五人、健勝をいのが五七中八。

子を抱きおはす石仏數かげに吾の祈りの昨日より長し 山田幸子
新しき年を迎へてはじめての成人となる吾子見るは嬉し 大塚晃
寒椿竹むら籠りの花開くひそけさ持ちて生きてゆきたし鶴田秀子

二 めでた型 三〇五(73)二二八・64(三一)

「おめでとう」は、何でも祝福の場で行われる挨拶ことばである。生れればおめでとう、七五三がおめでとう。入学も卒業も、就職も結婚も、銀婚、金婚、病氣全快も、何でも使える「おめでとう」である。その「おめでとう」を基幹とした正月の賀詞の展開を見る。

(賀詞)

(横書)

活版 手製 自筆 計

あけましておめでとうございます(三〇)	101	6	5	3	3
新年おめでとうございます(六)	2	2	3	3	3
新年あけましておめでとうございます	1	1	3	3	3
おめでとうございます(一)	1	2	1	4	8
おめでとう	1	1	1	4	1

計

(横書等)

活版 手製 自筆 計

漢字型では活版の三四三が手製自筆あわせての三〇八に上まわっていたのに対して、この型では活版一二七は、手製自筆あわせての一七八をはるかに下まわっている。これは若い人たちの多いのを物語

っているのである。手製が少いのは、(漢字型では手製が自筆の二倍以上になっている)。賀印を用いる場合に、漢字型のものが多いのでこれを使い、「あけましておめでとう」という賀印がないために自筆になったのであろう。この型の自筆一〇三は手製をはるかに上まわる。又、木版にするには文字の数が多いためんどでもある。賀正の木版は多く、あけましておめでとうの木版は二つしかない。「あけましておめでとうございます」が、「謹賀新年」に一位の位置をゆずっているのは十年前と同じであるのは、何となく改まった場においては漢字の方が上位にあると考える考えが心の隅にあるのではなからうかと思われる。然しこの型は、若い人たちがばかりではなく、戦前の教育を受けた人が八九人ある。三分の一弱である。次に、賀状の構成をわけてみる

賀詞 添刷 書込 計

あけましておめでとうございます	3	3	2	3	3
新年おめでとうございます	2	2	2	2	2
新年あけましておめでとうございます	1	1	2	2	2
おめでとうございます	1	1	1	3	4
おめでとう	1	1	1	3	1

(計)

活版 手製 自筆 計

のようになる。おめでとうございます。おめでとう。は、正月の場であるからこれによいのであるが、独立しては年賀の意味が十分とは云われない。口語が書きことばとして、新年の賀詞としては、前三者が、すでに伝統を持ったと云ってよい。ことに「あけましておめでとうございます」は、私の調査では「謹賀新年」について第二位の数を示している。この型の賀状は、歌詞が口語の書きことばで

あるために、印刷された添書にも「清らかな新春を迎え、佳き年のお慶びを申し上げます」「皆様の御多幸をお祈り申し上げます。何卒本年も御指導の程御願ひ申し上げます」など改まったものは尠く、「今年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます」「どうぞよろしくおねがいます」などだけ刷り込んだのが十数通もあった。それと口語賀詞の気安さに、つい心がほどけて、長い添書が多い。「寛政四年壬子といふ年の初めにと題し、手を折りに逢見むことを数ふればいま七年の七十の春」と詠んだ本居宣長と同年齢を迎え、病中無為の自らを省み、感慨を新たにしています。「新春を遠からずして久しく住みなれた職場をかわる時期も到来してきております。昔ふうの千支でいうと、ことしは寅の年にあたりますがこれから第二第三の人生がどうなりますか、昔から虎は千里を行って千里を帰ると言いますが、たとえ虎の尾をふむような思いをしようとも、虎の威を仮りる狐にはならぬように心がけるつもりでおります。御発展を祈ります」「物情騒然一年をどうやら家族一同無事に終えて、一層波瀾に富んだ昭和四九年を迎えました。一人一人では乗りこえられぬ浮世の荒波、なにとぞ本年もよろしくお願ひします。満州の曠野を思わず藤が丘一帯も、家並が多くなり西風に悩まされることも少なくなると思いますが、澄んだ青空と夜空に輝く星空は失くしたくないと思います。昨年O E C Dの会議の後にハンガリーとフィンランドとフィン族の国に訪ねて来ましたが、これも遠い遠い先祖は蒙古でもあるのか、共感をわかつことにぶつかって来ました。仕事の方はおかげさまで順調です。では一層のご健勝をお祈りします。」というのは中位で、こまごまと近況を伝えたもの、家族が別々に自己紹介をする様式も一通ではなくある。又、短歌だ

けを添書にするもの

初春の夢なれば空にはばたけよ吾子の瞳の今朝の輝き 谷本 清
足の骨折りに籠り来し吾や寅年の春を迎へて齡六十五 三船航児
初日の出思ひ新たに對ひつこの一年に期待をかける 片岡房枝
久々に家族集まる正月はこたつ囲んで話がはずむ 酒匂裕美
お酒少し飲みたいと思ふ日あり夫愛用の杯について高野八代子
木蓮の花ほの白く仰向ける朝春雷の長きとどろき 山本嘉將
峯一つ越えてなほ道は続きたりたゆたふ足を我と励ます 林 大
祝ふべきことある如く庭先の白梅が根に靈芝一むら 武藤辰男
やはらかに雨にぬれたる庭先で今宵の菜に大根をひく 片山恒子
遠くには去りもえずして鴨が熱柿つつき吾をうかがふ 片山鶯郎
石油不足物資不足の今朝の春心豊かに知恵を絞らむ 鈴木徳治
父の膝に抱かれてねむる幼児の閉ぢた臉に光とどけり 猪野知子
炬燵にて淋しさ斗り温め居り此冬二度目の寒さ也けり 井上克子

この型の添え書きでは「よろしく」というのが一〇一に對し「多幸健勝を祈る」が一三九とはるかに上まわっているのが特徴であるが、これは主に卒業生である、ここで何かほつとさせられるものがあった。然し自分のことばかり云うのが四四、何にもないのが三八もある。「くれぐれも御大切に」と友からの添書は心をうたれた。

三 御慶型 二〇六 (73) 二〇五 64 二六六

女用文集のなかに「新玉の年のはじめ御慶めでたく申納め候」とか「新玉の年のはじめの御寿めでたく聞え上げ候」などがある。その「御慶申納め候」などあるものの「御慶申納め候」が「御慶び申し上げます」の書きことばの年賀のことばになったものが、この御慶型である。

横(六) 活版 手製 自筆 計

謹んで新春のお慶びを申し上げます(三)	七	九	三	六
新春のお慶びを申し上げます(二)	七	九	一	三
新春を寿ぎ謹んでお慶び申し上げます	二	一	一	三
謹んで新年のお慶びを申し上げます(二)	三	五	一	四
新年のお慶びを申し上げます	四	四	四	三
謹んで初春のお慶びを申し上げます	三	一	六	〇
初春のお慶びを申し上げます(二)	四	二	二	七
謹んで年の初めのお慶びを申し上げます	二	二	二	二
年のはじめのお慶びを申し上げます	五	五	五	五
新玉の年の初めのお慶びを申し上げます	三	三	三	三

計

六 三〇 八五二〇六

御慶という語は、大鏡や平家物語にも見えて、めでたいことを意味しているが、江戸期に入って、正月を祝う言葉、年賀の意に用いられ慣用されたものと思われる。好色五人男に「丹波口の初朝、小六が罷出て御慶を申納」とか、俳諧炭俵に「長松が親の名で来る御慶かなー野波」など見える。庶民にも用いられて親しまれた語である。この口語化されたものがこの型である。御慶が訓よみにされて「およろこび」になったのであるが、字面では「慶」を保存しているのが多い。然し当用漢字で慶は「ケイ」の音だけで、「よろこび」と読ませない。従って御慶をおよろこびと読ませないことにならな。にもかかわらずこの型において

活版によるもの	お慶び	御慶	お喜び	およろこび	計
手製によるもの	四	五	五	二	〇

自筆で書くもの

計

表に明らかかなように、慶び及び御慶を用いたものは一〇四で、総数二〇六の五〇%を上まわり、喜びを用いたものは一七にすぎない。活版によるもので喜びを用いたものは皆無で、手製自筆のもののみある。よろこびは手製自筆によるものが甚しく多い。活版によるおよろこびは自覚的に用いられたものであり、自筆手製のものは、字面の多いのを厭ったせいも多分にあり、喜びも、訓みから来る音声で、書きなれた喜びによったと云えよう。猶注意すべきは、謹しんでを、文語の「謹しみて」にしたものが八、「お慶びを」の「を」を省いて、「新春の御慶申し上げます」は御慶のなごりかに見える、然し、御慶と書いても御慶びと活用語尾を残して訓みを明らかにしている。「御慶」はあるが「御慶申し上げます」はない。次に賀状製作の様式をわけてみる。

賀詞 添刷 書道 計

謹んで新春のお慶びを申し上げます	一	五	六	〇	六
新春のお慶びを申し上げます	九	四	一	三	三
新春を寿ぎ謹んでお慶びを申し上げます	四	一	七	三	三
謹んで新年のお慶びを申し上げます	一	六	三	四	四
新年のお慶びを申し上げます	四	一	七	三	三
つつしんで初春の御慶び申し上げます	二	一	七	〇	〇
初春の御慶びを申し上げます	五	三	七	七	七
謹んで年の初めのお慶び申し上げます	二	二	二	二	二
年のはじめのお慶び申し上げます	二	三	三	五	五
あら玉の年の初めのお慶び申し上げます	二	一	三	三	三

慶祝の対象として新年に呼びかけることばは、ここでは、新春三種、新年二種、初春二種、年の初め三種で、別々に集計すると新春一二、新年五七、初春二七、年の初め一〇になる。

添書の刷込みや自筆の書込みのあるものは三分の二以上で、「今年もよろしく」やそれに近いものが四三、身体をいとへとか健勝を祈るとか気遣ってくれるものは六二という数が出た。大半が四十年来の教え子達で、世相がどうなるうと忝いことだと思った。「世の中がこんなに混沌としてまいりますと自らの魂の休み場所は、内的革命によってしか得られないような気持になります。精神の貧困がもたらした哲学不在の現代に生きている責任はそれぞれ痛感すべきだと思えます。」はむづかしく、「私はあいかかわらずです。ぐうたら旦那と天才の娘の世話にあげられております」子供のいる人に再婚した彼女。「この鳥が呼びたくて改名しました」という彼女。「カレンダーの一枚一枚を悔なくめくれる一年にしたいと思えます。明るく前向きな一年にしたいと思えます」若い新婚の決意も聞かれる。「お目にかかれなまま昨年もすぎてしまいました。私には昔のことばかりなつかしく、一向前進がありませんの」は旧い同僚。「時の経つのが早いものでございます。お目もじもなかなか思うにまかせず、失礼を重ねております」は二十何年逢わない教子。「暮に網代へ移りました、魚も美味しく海もとてもきれいです。東京に近くなり、お目にかかれることを楽しみにしています」も。賀状を読んでゆくれたのしみは書き込みである。歌が添えられているのも楽しい。

春こまはくるくる廻るわが生もくるくる廻り八十となる久松潜一

朱漆の杯に酒注ぎわが顔の知命の齢を映しつつ祝ぐ 赤松元敏
ひたぶるに生きつきし身に眩しくも今漸くに朝の光さす四倉重子
春の俾あらば奔れよ菜の蒼さよりの透くを嚙下す身に春日真木子
思はずや油断大敵今にして高度成長足下危し 若林祐治郎
大和太鼓奉納打ちの構へして眉根涼しき少年並ぶ 永田とき
鳴き揚り空に翼ふる雲雀の声ふり注ぐなり光と共に 坂田富美
去にし日は遙けくなりて新しき娘の振袖を展く楽しき 岡本秀子

四 祝詞 型 一一三(73)一一・64(一一三)

新年の祝詞は、文語書きことばから口語書きことばに定着したもので、従来一定の数があつて、十年來ほとんど変らない数を示している。語感がやわらかで親しみやすいと云つた感じであり、敬愛の情も籠もっているようである。

(賀詞)

活版 手製 自筆 合計

謹んで新年のお祝詞を申し上げます 二 三 六 一〇

謹んで新春のお祝詞を申し上げます 二 二 二 一三

新春を寿ぎ謹んでお祝詞を申し上げます等二 二 二 三

(計) 横書(三)

三 三 三 三

三番目は(一〇)。等というのは、このほか「謹んで新春の賀詞を申し上げます」「新春の寿詞奉る」。「初春のお祝詞を申し上げます」各一である。親しみやすい語感から来るものが、この賀詞を支えているのである。賀状の構成は

賀詞 添刷 書込 計

謹んで新年のお祝詞を申し上げます 七 一〇 一七

謹んで新春のお祝詞を申し上げます 六 三 九

新春を寿ぎ謹んでお祝詞を申し上げます等 六 二 五 一三

である。賀詞のみで、添書も書込もないものが、約半数ある。このことは他の型にはほとんどない。添書や書込の半数は「今年もよろしく」の類、四分の一が健勝を祈り、残りが日常生活の短信といったもの。「先生のお姿を思い浮かべながらお便りいたしております」は、もう二十年も逢わない。「お嬢様の所においで折はぜひお立寄り下さい」もかれこれ十七八年逢わない。短歌もある。

伊豆の海は黄なる蜜柑と水仙の冷たき花の香に充る季 杉坂靖子
 新春に折る心の清く澄みて舞ひ散る雪の沁々し 応手 and 江
 六十路生くる心漸くなれにつつ銀の初水まほろ苦しも 山口池月

五 雑型その他 五〇

	活字	手製	自筆	計
謹んで新春のお祝い申し上げます等	七	一	四	二二
謹んで新年の御挨拶を申し上げます等	四	一	二	七
新年のことほぎを申し上げます等	三	〇	二	五
新春の御寿福をお祈り申し上げます等	九	四	三	一六
その他	四	六	〇	一〇
計	三三	二二	二	五七

この部は、残った分を総まとめにしたが、「謹んで新年(新春)の御挨拶を申し上げます」などは、古くからあり、活字の年賀見本の中にあると思われる。「お祝いを申し上げます」は、「お祝詞」が一歩だけたという所である。「新年の寿ぎを申し上げます」「新玉の年の初めの御寿めでたく聞え上げ候」あたりの口語化である。これは案外のびがない。「祈る」は、一つの型で、「謹んで新春を寿ぎ皆々様の御多幸を祈り上げます」は、活版で同文があるから、賀状見

本帳に出ていると思う。「謹んで新春を寿ぎ……」とか「新春を寿ぎつつしんで……」とかおいて、「お慶びを申し上げます」とか、「お祝詞を申し上げます」とかは、賀状印刷見本帳からおこったのではなかるうかと思ふ。賀状の構成では、一括して、

賀詞なし 賀詞のみ 添書印刷 書込み 計

(四) 一四 三三 三〇

歌詞なしというのは、15日角の黒と黄色の色紙二枚づつを対角に寄せて張ってある。右下に「ナ」とあるだけ。虎の色彩の象徴である。孫悟空みたいな虎の木版。文字なし。歌舞伎の隈取みたいな虎の顔らしきリノリユーム版。15と年号だけ。アプストラクト虎といえは虎、文字なし。賀詞のみの中には「寅年の寿詞竹林の虎喰哮すれば 臥龍震駭して 瑞祥の空に舞い上らん」などというものがある。添書は概ね自分のことを云ってある「満三年独りの生活を忙しく暮しました。何の変ったこともないのが幸せに思います。今年もどうぞ見守って下さいませよう」は老夫夫人。「私はこの二月三日が満八十七回誕生日です。毎夏ロンドンに行き信託関係の新旧文献を調べています。この夏も……百歳までまだ十年以上ありますから……」は老学究。一年の自分を回顧した九〇〇字ほどを葉書一ぱいに印刷したものもある。その賀詞「謹んで新年を賀し奉り、平素の疎遠を謝し、貴家の万福を祈ります」と念が入っている。「A Happy New Year」が三通ある。横書七。短歌

今年こそ今年こそはと希ひたる去年も暮れて空しさ残る岩田康子
 大空に光り輝き冠る日よ幸多かれな新しき年 佃 京子

はかりなき光也けり春の色の到らぬ里もあらじと思へば西尾光雄
 初春の心清めて神詣で身は健やかに家に栄えあれ 荻島 浩

まとめ

(賀詞類型)(枚数)		活版・手製・自筆	賀詞・添刷・書込	横書
漢文漢字型	六六	三四	九五	一六
おめでた型	三三	七五	一〇三	三三
御慶型	三三	九一	六五	二六
祝詞型	二二	三〇	六二	一六
雑型等	〇	七	三	三
(計)	一三〇	六〇	三三三	七三

これまでの記述を一表にまとめたと。この表の読み方によって、いろいろの問題と結論も出てくる筈である。

賀詞の形態がある程度の類型にわけられることが可能であろう、一つの型にかたまったものはたやすく変ってしまわないことがわかる。漢字漢文型については、日本人が、漢字を輸入して、すでに千年以上を経ており、日本人の考え方は、ほとんどこの漢字で思考することが多く、言葉も漢字に支えられたものが多く、日常語の中から漢字によって成り立っている語をのぞいたら、日本語は成立しないと言ってもよいのであり、改まったことがらは、ほとんどの漢字によって出来た日本語である。正月、元旦、この慶祝のために、まず漢字漢文を主として出来た言葉が用いられるのが自然である。よこそ、漢字漢文型が、全体の五〇％を示すのは当然であり、その他の御慶、祝詞なども、漢語と云えば漢語である。漢字は制限されても、廃止することはほとんど不可能であろう。

この中では、話しことばから来たものは、おめでた型であるが、これは、これは全体からいうと二三％ぐないになる。これは必ずしも年々数を増すというのではなく、前にも一寸ふれたように十年間

ほとんど変化がない。改まったものに対する日本人の一つの態度を見ることが出来るようである。

年賀状は、何と云っても多数の書状を書くことになるので、活版や孔版その他を用うようになり、そのためにレイアウトとか、工夫を加えたり、木版や自筆の面などを添えたりすることになる。一つの遊びが加わるために、やりとりにたのしみが出る。用事のない手紙ほどたのしみものはない。唯一の用のない年賀状は、生活の心の心を休めさせるもの一つであることが、少くとも私にとってのたのしみである。付録として今年の私の年賀状にかかげた歌を次にかかげる。

せんだんの裸木の梢冬空につぶ果点じて年はてむとす

家妻の散り葉うとみせんだんの散りつきて梢ののいさぎよき冬夜半の風雑ぎ伏せ揉み乱しすぎし朝の陽に静かなり庭の竹群

蒼よりほぐれて匂ふ花瓶のぼら映りあひ盛り久しき

さされつつただ一とぎの花のさかりうすき生命を傾けてばらは花の上に君のすがたを重ねつつこの白ばらの白さを愛す

花々に心かまけて居る間さへその須臾々々をうつろふかばらは子ら孫ら我ら加へて二十八年に一度逢ふ正月来たる

初孫ら太郎・直美が中学に行くといふ我の七十の春

淳・健一小学にのぼる今年なりぢぢばの庭の梅も初咲き

盲進の高度成長のはてかこれ見せかけの繁栄馬脚を露はす

石油規制目にも見せて電気・建材——紙・洗剤までたちまち乏し

天にスモッグ地にあくた満ち、人は児を鬼より惨く棄て致す世か

摩訶般若人間の所業葉莢の熔金より観音の尊像を鏡く

ペトナムの硝煙にほふ葉莢より現じたまへり南無観世音菩薩